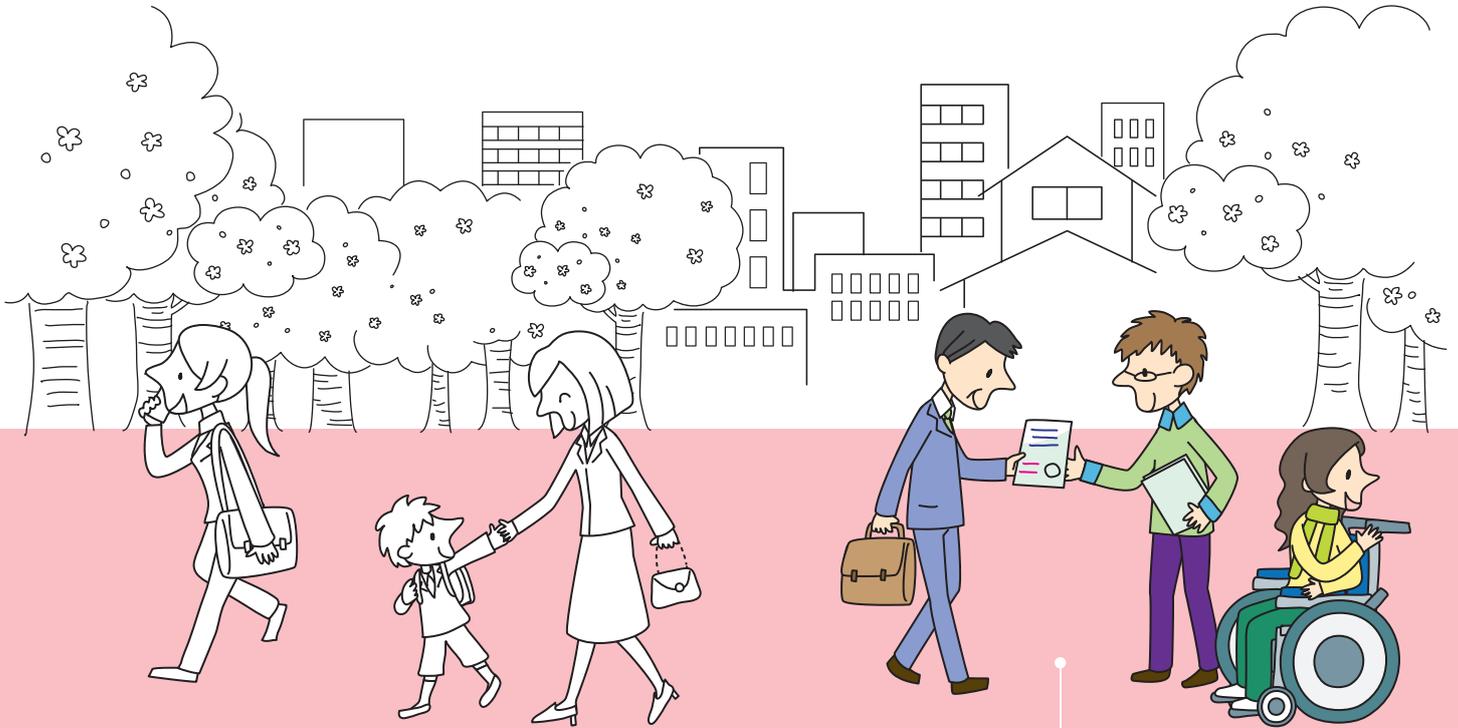


きずな

2012年
(平成24年)

4



4月2日

世界自閉症啓発デー

2007(平成19)年の国連総会で制定。この日は世界各地で自閉症に関する啓発が行われ、日本では「世界自閉症啓発デー・日本実行委員会」がシンポジウムの開催、ポスターやパンフレットの配布などを通して、自閉症等の発達障害に対する理解を呼び掛けています。

特集テーマ 人権

人権文化があふれる明日をめざして

- 2 支えあう「いのち」 確かめあう「きずな」
金澤和夫((公財)兵庫県人権啓発協会理事長)
- 3 ニコニコ母ちゃん
林明日賀さん(加古川市立嶋里小学校)
- 4 大切にしたい 人と人のつながり
「きずな」づくり
-人権の視点から-
福田弘さん(筑波大学名誉教授)
- 5 子どもの力を信じて
金澤泰子さん、翔子さん(書家)
- 6 まちのKIZUNAレポート
生涯学習応援隊 so-so.39(丹波市)
- 7 人権啓発ビデオ「桃香の自由帳」の
活用ガイドが完成
東日本大震災に寄せて
- 8 情報ぷらざ



支えあう「いのち」 確かめあう「きずな」

公益財団法人
兵庫県人権啓発協会理事長
兵庫県副知事

かなざわ
金澤

かずお
和夫



職場や学校、地域などさまざまな場所での新たな出会いがある4月、人と人の新しいつながりを実感する季節です。一方で、児童虐待をめぐる痛ましい事件や、度重なる災害により甚大な被害が発生するなど、昨今「いのち」や人権の大切さを実感させられる場面が見られます。

東日本大震災から1年余が経過しましたが、今なお、多くの人々が厳しい生活を余儀なくされ、苦しんでおられます。改めてお見舞いを申し上げ、一日も早く希望の持てる生活ができるようお祈りするとともに、阪神・淡路大震災での経験を踏まえ、支えあうことの大切さを身をもって体験した県として、息の長い支援を続けていきます。

今日、国際化や情報化、少子・高齢化の進展、人々の価値観や生き方の多様化にともない、人権課題もますます多岐にわたり、複雑化しています。21世紀は「人権の世紀」と言われて久しいですが、いじめ、子どもや高齢者への虐待、配偶者などからの暴力（DV）、インターネットを悪用した人権侵害などが後を絶ちません。

こうした問題を解決する糸口として、家庭や地域における、人と人とのつながりづくりや支えあいが大切ではないでしょうか。家族とともに囲む食事、近所の人との世間話や挨拶^{あいさつ}、ちょっとした助け合いなど、何気ない日常の関わりが、人と人とのきずなを育みます。人とつながっている、見守ってくれる人がいるという実感が、悩

みや問題を抱えたときの心の支えになるのではないかと考えています。

本県では、「21世紀兵庫県長期ビジョン」を改訂しました。家庭・地域・学校・職場が連携し、人と人が多世代につながり合う環境づくりを県民の皆様とともに進めることにしております。

人権尊重の理念が定着した社会の実現に向け、着実な歩みを積み重ねていくことが必要です。ともに力を合わせ、「支えあう『いのち』を実感し、『きずな』を確かめあえる」兵庫をつくっていきましょう。



一人ひとりの個性を尊重し、互いの違いを認め合い、共に支え合う「共生社会」を実現するためには、互いの人権を尊重することが自然に態度や行動に表れるようになることが大切です。今月は、自分だけでなく、他者の人権も大切にするために、県民一人ひとりが、「人権」について何をすべきかを考えます。

ニコニコ母ちゃん

はやし あす が
林 明日賀 加古川市立鳩里小学校3年(受賞時)

ぼくは、よく、母ちゃんにおこられる。すぐ妹に、いじわるをしてしまうから。かたづけを、しないから。ものをよくなくすから。

ぼくが、なってほしい母ちゃんは、おこらない母ちゃん。やさしくて、なんでもかってくれて、おこづかいをいっぱいくれる母ちゃんにもなってほしいなあ。

どうしたら、そんな母ちゃんになってくれるんだろうか。自分のやることは、自分でして、妹にわるぐちや、ぼうりよくをやらなければ、やさしい母ちゃんになってくれるのかなあ。自分のやることを自分でしないのは、次にやりたいことがあるからです。妹に、いじわるをするのは、妹が、さきに、なぐったり、いやなことを言うからです。

明日からのぼくは、次にやりたいことをはじめる前に、心の中で「やることは全部おわたか」自分で、自分に聞くようにする。そうすれば、やることもわすれないし、かたづけもできるし、ものもなくなるだろう。妹には、いつもやさしくしていれば、わるいことをしてこないだろう。

これで母ちゃんは、おこらないニコニコ母ちゃんになってくれる。

(平成23年度のじぎく文芸賞優秀賞受賞作品)

“ニコニコ母ちゃん”(林明日賀さんの母)のコメント

明日賀は5人きょうだいの2番目で、笑顔あふれる自慢の息子。妹に意地悪もするけれど、それ以上に仲が良く、いつも頼られている存在です。このたび、明日賀が一生懸命考えてくれたおかげで、私はきっと“ニコニコ母ちゃん”になれると思います。そして、“いつもニコニコ家族”を目指したいです。

頑張れ、明日賀!!



誰もが自分らしく生きるために



大切にしたい人とのつながり、ぎずなづくり——人権の視点から——

筑波大学名誉教授
福田 弘さん

2011（平成23）年12月、国連総会で「人権教育および研修に関する国連宣言」が採択されました。すべての人が人権と基本的自由に関する情報を知り、探求し、受け取る権利だけでなく、人権教育および研修への権利を持つことなどをつたう画期的な宣言です。

現在、国連の「人権教育のための世界計画」第2段階が進められています。その目的は、幼稚園から高校までの学校における人権教育促進の継続、大学等における人権教育ならびに教職員、公務員等の人権研修の促進とされています。

新宣言はこうした国際的取り組みを強力に支援することでしょう。

ここ十数年
来の国連による
人権教育事

業は日本の人権教育の改善・充実に大きく貢献してきました。いまや人権教育に関する国際的知見や経験を踏まえた人権教育が、全国的に学校や地域で展開されつつあります。それにより、「自他の人権を守るための実践行動」を生み出す土台としての人権に関する知的理解の深化と人権感覚の育成が徐々に成果を上げていくのです。

しかし、こうした努力に挑戦するかのよう
に恐ろしい出来事が続発しています。大震災、
大津波、そして原発事故による放射性物質放
出、社会的不平等や経済的格差の拡大、貧困
の問題等々です。こうした出来事は危機的な
人権問題状況をもたらしています。

人はすべて尊厳と価値において平等であり、
その尊厳にふさわしい生活を営むうえで不可欠
なさまざまな権利と自由から成る人権を持ち
ます。しかし、その人権を侵害され、十分に
享受できない人々が数多く存在しています。
残念ながら人権教育は、そうした現実を即座

に解決する即効薬的効力は持ちません。

教育に携わる者として、もどかしさを感じるとともに、他方で、自己犠牲をいとわずに
そうした人々に寄り添い、人権実現のための
支援を根気強く実践している人々に敬意と謝
意を抱かざるを得ません。

そうした人々の行為こそ、単なる思いやり
や同情といった感情からではなく、人権の知
的理解と人権感覚双方の協働作用から生まれ
る真の人間の連帯としての「ぎずな」づくり
そのものであるといえるでしょう。とすれば、
まさにそうした資質や能力を育成しようとする
人権教育には、大きな可能性と夢が秘めら
れていることとなります。

真の「ぎずな」づくりのための新たな一歩
を踏み出す4月としたいものです。

プロフィール

1944（昭和19）年生まれ。国立教育研究所研究員、奈良教育
大学助教授、筑波大学大学院教授などを歴任。現在は筑波大学
名誉教授のほか、(公財)人権教育啓発推進センター参与、文科省
人権教育の指導方法等に関する調査研究会議座長を務める。



取材ノート
から

子どもの力を信じて

書家 金澤 泰子さん、翔子さん

東京で書道教室を開いている書家、金澤泰子さん。同じ道に進んだ長女の翔子さんはNHKの大河ドラマ「平清盛」の題字を手掛けるなど大いに注目を集めています。その活躍ぶりは、二人三脚で歩んできた親子の固い絆がもたらしたものです。

時に厳しく時に抱きしめ

生後間もなく翔子さんがダウン症であると分かり、金澤さんは子育てや将来に不安を覚え、精神的に追い詰められました。ある日、ミルクを与えようとした時、翔子さんの小さな手が、金澤さんの頬ほほに「ママ頑張れ！」と励ますかのように触れたそうです。この瞬間、「翔子は必死に生きようとしている。その気持ちと力を信じて育てていこう」と決心しました。

金澤さんの一番の心の支えとなったのは13年前に他界した夫、裕さんでした。ダウン症を「神からの挑戦」と受け入れ、妻と娘を大きな愛で包みました。翔子さんの書の才覚にいち早く気付いたのも裕さんでした。

親として、子どもに立派になってほしいと願うのは当たり前ですが、一方で、社会通念や自分の価値観で育てていくとき、周囲との過度の

比較や競争環境の中に子どもを入れてしまうことがあります。金澤さんは翔子さんを「障害者」だからといって潜在的な力を閉ざしてしまうことのないように心掛けてきました。5歳で筆を握った翔子さんを厳しく叱ることもあれば、良い作品を書いた時には抱きしめて褒めました。



翔子さんが書いた「絆」。雅号小蘭は、泰子さんの蘭風を継ぐ意味を込めています

翔子さんも大好きな母の気持ちに伝えようと、書家としての力を磨いてきました。翔子さんが書く力強い線には、そつした純粋な魂が宿っているといえます。

二人で被災地支援活動も

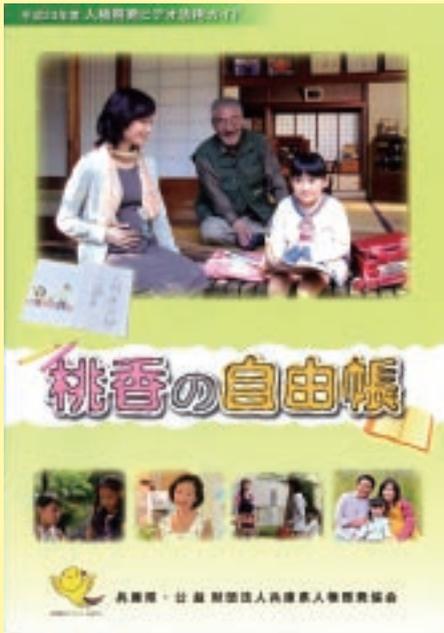
金澤さんはこれまで支えてくれた人々や社会

への感謝の気持ちとして、三つの取り組みたいことがあります。まず、自身の子育ての経験を発信すること。二つ目は、障害のある人が安心して過ごせるよう施設などの環境づくりに役立つ活動をする。三つ目は、翔子さんと二人で東日本大震災の被災地への支援活動を続けることです。

翔子さんは震災直後のテレビを見て「助けに行きたい」と言い、二人は被災地を訪れました。復興に向けて必死に頑張っている人々の姿を目の当たりにした翔子さんは、その気持ちを「ともに生きる」という書に表し、被災者を励ました。「みんな一生懸命に生きている。その姿を互いに尊重し、愛情を込める。すべての存在に慈愛の気持ちで接することは、親子関係だけでなく、あらゆる人権の尊重につながるのではないでしょうか」と金澤さんは語ります。



「桃香の自由帳」の活用ガイドが完成しました



(公財)兵庫県人権啓発協会では、平成23年度人権啓発ビデオ「桃香の自由帳」の完成に合わせ、学校や地域の人権学習に役立つ活用ガイドを作成しました。A4判15ページのガイドには、登場人物とポイントとなるせりふ、地域や子育て、高齢者に関する参考資料など、物語を深く理解できる情報を満載。内容がつかめたら「学習展開例」にならって学習を進めていきましょう。話し合いたいテーマや参加者の状況、時間配分などに応じて、「ワークシート」から必要な項目を選んでください。このガイドを工夫して、新たな気づき生まれ日常生活につながる機会を考えてみませんか。



「桃香の自由帳」(文部科学省選定作品)
 出演/星奈優里、志村東吾、毛利恋子、伴杏里、長内美那子、浜田晃 ほか
 企画/兵庫県、(公財)兵庫県人権啓発協会
 企画協力/兵庫県教育委員会
 製作/東映㈱
 ●貸し出しについて
 (公財)兵庫県人権啓発協会研修部 TEL 078(242)5355
 ●購入について 東映㈱関西営業推進室 TEL 06(6345)9026
 ※字幕副音声付き/36分
 ※DVDとVHSビデオの2種類があります

「桃香の自由帳」のねらい

核家族化や都市化によって、同じ地域に住む人同士が名前さえ知らなかったり、相手のことを誤解して排除したりするなど、私たちは気づかぬうちに「人とのつながり」を断ってしまうことがあります。東日本大震災後、あらためて「人と人とのきずな」が見直されています。日常の何気ない言動を振り返ることで、私たちが見失いつつある、人と人とが寄り添い、共に生きる温かな世界とは何かについて考えてみませんか。

東日本大震災に寄せて

～読者の皆さんから寄せられた東日本大震災に関する体験記を紹介します～

福島之母

藤田 美保さん(神戸市)

放射線の数値がまだ高く、不安な日々を過ごしている福島県中通りの子どもたちが兵庫県にキャンプにやって来ました。中にはお母さんも付き添いでいらっしやいました。思い切りはしゃいで、たくさん遊び、屈託なく見受けられる子どもたちに比べ、お母さん方は緊張しておられる様子でした。

わんぱくが過ぎる一人の男の子のいたずらにスタッフが手を焼いていた時、あるお母さんがその子をいさめました。大人のこちら怖いほど厳しく叱り、注意した後で、「おばちゃんきつい言い方したけどな、一緒に福島から来たんだから、おばちゃんはおめえのお母さんと同じだ。おめえがおかしなことしてたら、おめえのお母さんの代わりに注意するからな」とあちらの温かいお国言葉でとうとうと説かれているのを聞きました。

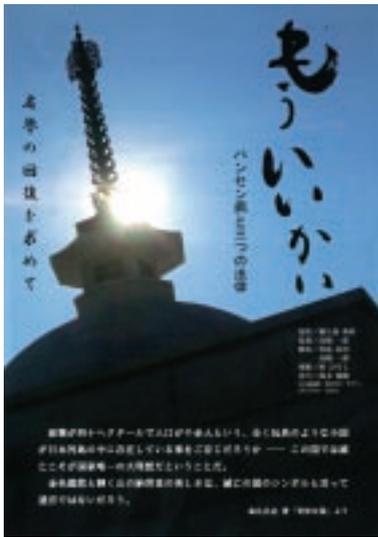
人情が薄まってしまった都市部では、本気でよその子に注意することなどなく、大人は公共の場でさえマナーを守れない子どもにも何も言えません。このお母さんの本気のしつ責を目にした時、私は自分の人としての成長の足りなさを深く恥じ入るとともに、「ああ、この人たちだったら大丈夫だ。福島の子は未来は明るい」と思えました。福島にとって一番大切なことは未来を担う子どもたちの存在です。彼らがたくましく育ってくれることが、福島の子の素になるのですから。

どうか負けないでと思います。私も15歳で震災を経験しました。がれきりの中を歩き、仮設市場を横切って高校に通いました。「とんだ15の春」と言われましたが、自分より大変な同級生に逆に励まされるありさまでした。人は生きていく以上は生き続けなければなりません。壊れてまた作り直す、街はそうでした。人は傷を負い、人に癒やされるしかありません。だから「また骨休めに来てくださいね」、福島之母にそう伝えたいです。



ハンセン病問題を描いたドキュメンタリー

「もういいかい～ハンセン病と三つの法律」



病名は知られていても、ハンセン病の症状や、患者とその家族が抱える不安や問題についてはあまり知られていません。そのため患者に対する偏見や差別は根強く残っています。

「もういいかい ハンセン病と三つの法律」は、全国のハンセン病療養所で生活している人や関係者ら約20人の声を紹介し、「癩予防二関スル件」(明治40年)、旧「癩予防法」(昭和6年)、新「らい予防法」(昭和28年)の下、強制的に隔離された人々の当時の状況や、その後の生活の実態などを検証。隔離された人たちの「もういいかい?」という切実な思いが伝わってきます。

製作/鶴久森典妙、「もういいかい」映画製作委員会
監督/高橋一郎 脚本/川島信治、高橋一郎
撮影/原ひろし 語り/鈴木瑞穂 ※2012年/143分

●上映会の予定

4月22日(日) 尼崎市立労働福祉会館中ホール 10:30～・14:00～
5月20日(日) 大阪市立阿倍野区民センター大ホール 14:00～



プロデューサー・鶴久森 典妙さんからのメッセージ

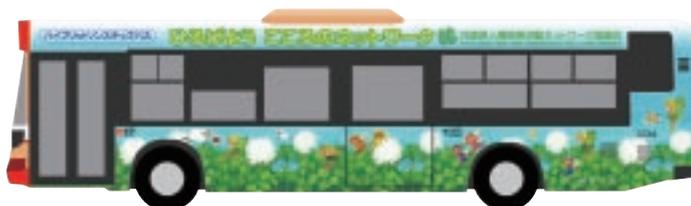
ハンセン病患者の高齢化が進む中、一人ひとりの語りを通して「名誉の回復とは何か」「命の尊厳とは何か」を問い掛けます。家族との絆が断たれ、今なお、心に重い苦しみを抱えている人たちの思いを正しく伝えるとともに、ハンセン病に対する偏見をなくし、名誉を回復することにつながればと願っています。

(公財)兵庫県人権啓発協会では 賛助会員を募集しています

入会特典	①「ひょうご人権ジャーナルきずな」(月刊)をお送りします ②人権講演会等の開催についてご案内します ③法人・団体会員には要請に応じ、研修会や講演会等に講師を派遣します(1口につき研修料から1万円を免除)
年会費	個人会員……………1口1,000円 法人・団体会員 ……1口1万円

人権啓発バスが運行中です

人権啓発のラッピングバスをご存じですか。絵本作家、永田萌さんによる妖精たちがクローバー畑で遊んでいるイラストが車体側面に描かれ、道行く人たちの目を楽しませています。阪神(阪神バス)、東・中・西播磨(神姫バス)、淡路(淡路交通)の各地域で運行中です。



「きずな」が誌面リニューアルして1年が経ちます。読者の皆さんからは「読みやすくなった」という声や「もっと実践者の活動を知りたい」などの意見が寄せられています。編集室では、より身近に「人権」を感じてもらえるよう、タイムリーな話題を分かりやすい文章と読みやすい誌面構成で、できることから一歩ずつ進化させています。その一つが、地域の取り組みを掲載すること。皆さんの周りに人権に関するユニークな活動や事業があれば、ぜひ紹介してください。(田中)